

篠山市

八上上遺跡

—一般国道372号線 交通安全施設等整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003年1月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

篠山市

やかみかみいせき
八上上遺跡

—一般国道372号線 交通安全施設等整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003年1月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は、篠山市八上上に所在する八上上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般国道372号線交通安全施設等整備事業に先立つもので、兵庫県柏原土木事務所（現 兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所）の委託を受け、兵庫県教育委員会が平成6年度に第1次確認調査と第2次確認調査そして全面調査を、平成7年度に第3次確認調査を実施した。
第1次確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・高井治己が、第2次確認調査は水口富夫が、第3次確認調査は中村 弘が、全面調査は山田清朝・山上雅弘・三原慎吾・所崎明雄・高井治己が担当した。
3. 整理作業は、平成13年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
4. 遺物の接合・実測・復元トレースについては上記事務所整理保存班（平成13年度は整理普及班）で行い、遺物写真撮影については株式会社 イーストマンに委託した。
5. 本書用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 本序用いた遺物番号は、本文・挿図とともに統一している。
7. 本書の図表は岸野奈津子の補助を得て山田行った。
8. 本書の報告は兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
10. 最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

山本昭彦（篠山市）・西田辰博（篠山市教育委員会）

目 次

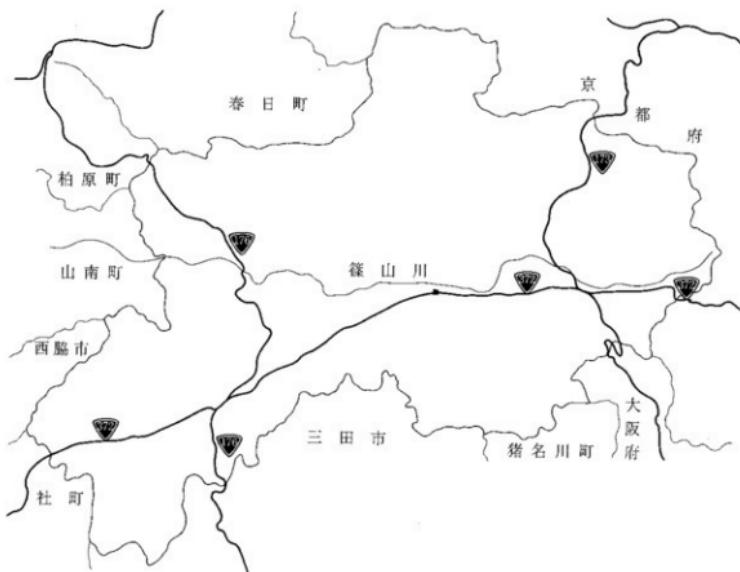
第1章 八上上遺跡	
第1節 地理的環境.....	(山田) 1
第2節 歴史的環境.....	(山上) 4
第2章 調査に至る過程	
第1節 確認調査.....	(山田) 6
第2節 全面調査.....	(山田) 8
第3節 整理作業.....	(山田) 8
第3章 調査の結果	
第1節 調査結果の概要.....	(山田) 9
1. 基本層序と遺構の検出.....	9
2. 調査の概要.....	9
第2節 I区の調査結果.....	(山田・山上) 10
第3節 II区の調査結果.....	(山田) 12
第4節 III区の調査結果.....	(山田・山上) 13
1. 概要.....	13
2. 鎌倉時代の遺構と遺物.....	13
3. 室町時代以降の遺構と遺物.....	24
第4章 まとめ	
第1節 鎌倉時代の土器について.....	(山田) 25
第2節 総括.....	(山田) 30

挿図目次

第1図 八上上遺跡の位置	1	第16図 P 1 0 出土土器	13
第2図 八上上遺跡近景	1	第17図 III区平面図	13
第3図 八上上遺跡の立地	2	第18図 東半部柱穴位置図	14
第4図 遺跡周辺地形図	3	第19図 P 1 6	14
第5図 周辺の遺跡	5	第20図 P 2 4 出土土器	15
第6図 調査位置	6	第21図 III区柱穴出土土器	18
第7図 確認調査	7	第22図 P 6 7 出土土器	19
第8図 第2次・3次確認調査	7	第23図 SK 1 5 出土土器	20
第9図 地区割	8	第24図 III区土坑出土土器	21
第10図 基盤層出土土器	9	第25図 SD 0 5 出土土器	22
第11図 調査風景	9	第26図 SD 0 7 出土遺物	23
第12図 I区平面図	10	第27図 滝出土土器	23
第13図 SD 0 1	11	第28図 III区包含層出土土器	24
第14図 I区出土遺物	11	第29図 主な一括資料	26・27
第15図 II区平面図	12		

図版目次

図版1 遺構	II区全景 西から	III区包含層出土土器 (41・43)
	旧河道断面 北東から	P 61出土土器 (40) P 54出土土器 (52)
図版2 遺構	I区全景 西から 東端部 北東から	P 16出土土器 (47) SK 1 6 出土土器 (59)
図版3 遺構	II区全景 西から	P 44出土土器 (37) SD 0 5出土土器 (60~62)
図版4 遺構	西端部 西から 中央部 東から	SD 0 7出土土器 (72) SD 1 3出土土器 (73)
図版5 遺構	SD 0 2 北から	SD 0 3出土土器 (74) SD 0 6出土土器 (75)
図版6 遺物	基盤層出土土器 (1)	図版7 遺物
	P 10出土土器 (7~9・11)	P 61出土土器 (40) P 25出土土器 (41・43)
	P 24出土土器 (12・20) P 67出土土器 (21)	P 16出土土器 (47) P 54出土土器 (52)
	P 07出土土器 (27) P 41出土土器 (29)	P 44出土土器 (37) SK 1 6 出土土器 (59)
	P 33出土土器 (36)	SD 0 5出土土器 (60~62)
		図版8 遺物
		SD 0 7出土土器 (72) SD 1 3出土土器 (73)
		SD 0 3出土土器 (74) SD 0 6出土土器 (75)
		図版9 遺物
		I区 旧河道出土土器 (6・4)
		III区 包含層出土土器 (77・78)



第1図 八上上遺跡の位置

第1章 八上上遺跡

第1節 地理的環境

八上上遺跡は、篠山市八上上に位置する。篠山市は、兵庫県のはば内陸部中央東端部に位置する（第1図）。篠山市は、平成10年度までは、多紀郡であったが、翌年度から同郡篠山町・西紀町・丹南町・今田町が合併し、篠山市となったものである。市域の面積は約377km²と広域で、市域の南側は三田市と、西側は加東郡社町と、北側は氷上郡春日町・柏原町と、そして東側は京都府園部町と、境を接している。

篠山市は、篠山川を中心とした篠山盆地を中心に市域が形成されている。篠山盆地は、東西約12km、南北約2kmを測り、盆地中央部における標高は約210mである。篠山盆地の中心をなす篠山川は、一級河川加古川の一支流をなす。京都府との境に位置する三国岳を源とし、南行した後、当遺跡の北西側で東西方向に大きく屈曲する。当盆地をほぼ東西に流れ、氷上郡山南町で加古川に合流している。河川長は約36kmを測る。

八上上遺跡は、篠山盆地の東部にあたり、南流する篠山川が東西方向に屈曲し地点の西側約3kmの篠山川左岸に位置する。篠山盆地の南辺部にあたり、盆地南辺を形成する山塊の一つである高城山の北麓部にあたる。遺跡の標高は、本発掘調査地区で211m～212mを測る。

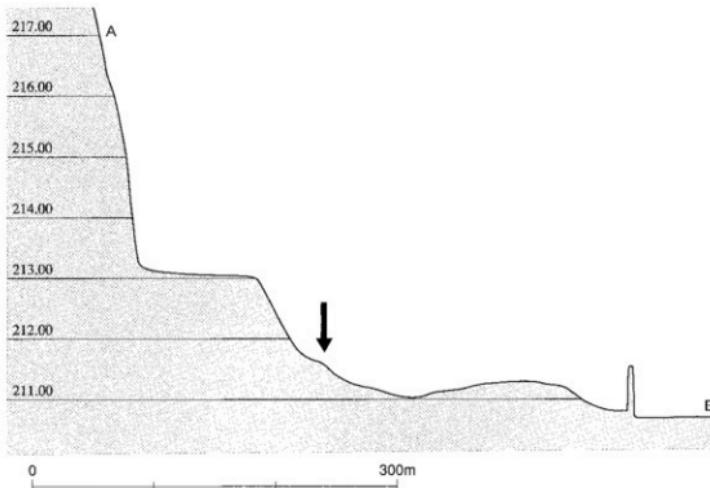


第2図 八上上遺跡近景

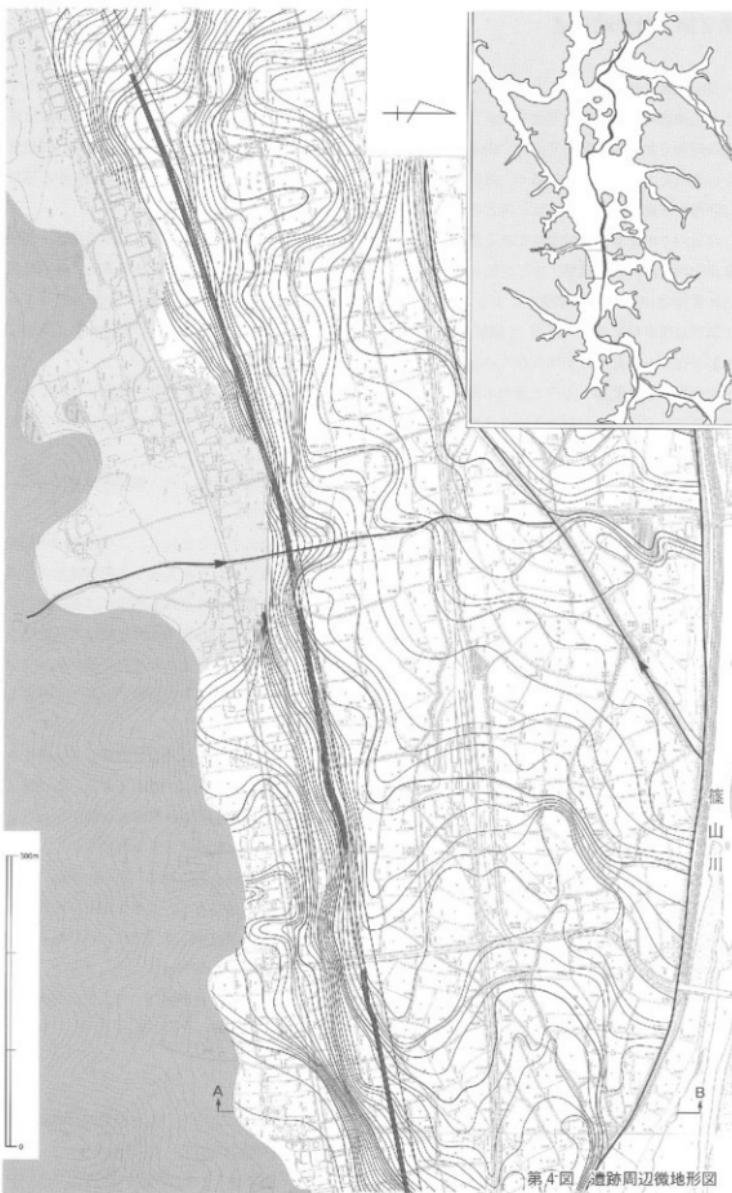
調査地周辺の微地形を詳しくみると（第4図）、調査対象地は、篠山川によって形成された氾濫原と当遺跡の南側にあたる高城山の山塊から派生する山麓部の間に形成された段丘崖のラインとはほぼ一致する。より具体的にみると、第2次以降の確認調査対象地は、段丘崖もしくは氾濫原面にあたる。これは、洪水起源の堆積層が確認された（第2章第1節）確認調査の結果とも合致する。

本発掘調査を実施した地区については、I区の西端部は氾濫原にかかり、これより東側は段丘面上に立地する。そして、III区東部は段丘面上の微高地にあたる。後述する、I区で検出した旧河道およびIII区における遺構の集中は、上記の微地形を反映したものと考えられる。

なお、第3図からも明らかなように、段丘面の広がりは篠山盆地の規模からして、わずかなものである。本発掘調査を実施したIII区あたりで、南北方向の規模は約30mである。



第3図 八上上遺跡の立地



第4図 遺跡周辺微地形図

第2節 歴史的環境

篠山盆地には古墳や中世山城を中心に稠密に遺跡が分布するが、ここでは中世遺跡の概要を述べて八上上遺跡周辺の歴史的環境を紹介⁽¹⁾したい。ただし、篠山盆地周辺では国史跡篠山城跡やこの武家屋敷の調査を除くと、中世遺跡の調査は未だ少ない。とくに中世集落については囲場整備に伴って調査が行われた大山莊関連の事例や、近畿自動車道開通で行われた事例が知られるが、篠山盆地の中心部では詳細を把握できる事例はほとんどない。

盆地内で中世集落の可能性がある遺跡としては青山台西遺跡・八ノ坪遺跡・寺内付田の坪遺跡・郡家宮東の坪遺跡・岩崎遺跡⁽²⁾などが知られる程度である。このうち青山台西遺跡・八ノ坪遺跡・寺内付田の坪遺跡は1978年の確認調査によって瓦器が出土し、郡家宮東の坪遺跡では1979年の確認調査によつて溝状遺構が検出され、瓦器・土師器が出土している。また、この他には1974年に岩崎遺跡で工事中に瓦器が採取されたことが知られているが、集落の様相を明らかにできるものはない。

中世墓は泉中世墓・寺内上藤の木遺跡・東仙寺谷中世墓などが知られている。泉中世墓・寺内上藤の木遺跡では丹波焼を藏骨器とする墓跡が発見され、東仙寺谷中世墓では1辺1mの石積基壇の存在が知られる。

寺院跡は谷奥などに立地するものが多い。八上上遺跡の南側には誓願寺跡・八上東陽寺跡が知られ、奥谷川の深部には東仙寺・曾地谷にはやはり深部に瀧仙寺・福山寺がある。

山城では高城山の八上城跡を中心としてその城下町が山麓一帯に広がるとされる。この遺跡は中世段階では多紀郡を支配した波多野氏、鎌倉期段階では前田玄以・勝茂父子などが入城し多紀郡経営の拠点としている。八上城跡は広く郭郡を配置する大規模城郭であるが、城下は波多野氏段階には奥谷川の谷一帯に分布したといわれる。居館が立地したのは殿町周辺といわれ、1990年の調査で堀跡と丹波焼などの遺物が出土している。また、殿町の南側には丸山城が、谷の西側の丘陵上には法光寺城があってそれぞれ城下城の防衛を計っている。このように波多野段階では谷中全体に城下の施設が点在して分布した。

織豊期段階は八上上遺跡の西側に城下が移動したといわれ、春日神社や主善屋敷と呼ばれる場所を中心に広がっていたとされ、京街道に面した現在の集落の西端には鉤の手の屈曲が認められる。この他、八上城跡に関連する遺跡には、天正7年（1579）の明智光秀による八上城攻撃戦時の陣城がある。このうち、現在は篠山川の北側に残される般若寺城跡・勝山城跡・塚ノ山城跡の3箇所が知られる。

他の山城遺構では曾地城跡・安明寺城跡・堂山城跡・大土西ノ山城跡・岩崎城跡・四季山城跡・小谷城跡など多数が存在する。しかし、いずれも小規模で単純な縄張り構造である。盆地北側の多紀連山の支脈に位置する山城も総じてこの傾向が強い。中世居館では大湊館（県史跡）が周囲の土壘・堀が完存し当時の様子をよく伝えている。しかし、他の遺構には状況が不明なものが多い。

近世では篠山城跡および城下町関係の調査が多数おこなわれている。調査事例としては二の丸大書院や武家屋敷域の調査が多く、大書院や石垣などの整備も調査に並行して行われている。

（註）

1. 本文の遺跡名や内容に関しては、特に断わらないかぎり次の文献によった。山本明彦他『篠山町文化財資料 第10集 篠山町遺跡詳細分布調査報告書』 篠山町教育委員会 1989年刊行
2. 山本三郎 「丹波出土の瓦器について（1）」『兵庫考古 第4号』 1976年刊行



第5図 周辺の遺跡 (1/50,000) 「篠山・福住」

遺跡名

- | | | | |
|------------|--------------|------------|-------------|
| ① 八上上遺跡 | ② 餓頬寺跡 | ③ 八上東陽寺跡 | ④ 御所ヶ谷窯跡 |
| ⑤ 東仙寺谷石仏 | ⑥ 東仙寺谷中世墓 | ⑦ 東仙寺谷五輪塔 | ⑧ 東仙寺跡 |
| ⑨ 瀧仙寺 | ⑩ 福山寺 | ⑪ 泉中世墓 | ⑫ 土井谷遺跡 |
| ⑬ 青山台西遺跡 | ⑭ 藤八幡神社旧跡 | ⑮ 篠山藩主王地山焼 | ⑯ 寺内上藤の木坪遺跡 |
| ⑰ 玉水 | ⑮ 御下屋敷跡山内焼窯跡 | ⑯ 八ノ坪遺跡 | ⑰ 寺内付田の坪遺跡 |
| ㉑ 郡家宮東の坪遺跡 | ㉒ 岩崎遺跡 | ㉓ 清尾寺遺跡 | |

城跡名

- | | | | |
|------------|----------|-------------|-----------|
| 1. 八上城跡 | 2. 薙丸城跡 | 3. 法光寺城跡 | 4. 曾越城跡 |
| 5. 安明寺城跡 | 6. 堂山城跡 | 7. 洞田山館跡 | 8. 般若寺城跡 |
| 9. 大土西ノ山城跡 | 10. 大瀬館跡 | 11. 勝山城跡 | 12. 塚ノ山城跡 |
| 13. 井根山館跡 | 14. 沢田城跡 | 15. 国史跡篠山城跡 | 16. 飛の山城跡 |
| 17. 藤井館跡 | 18. 岩崎城跡 | 19. 谷山城跡 | 20. 小丸山城跡 |
| 21. 四季山城跡 | 22. 小谷城跡 | | |

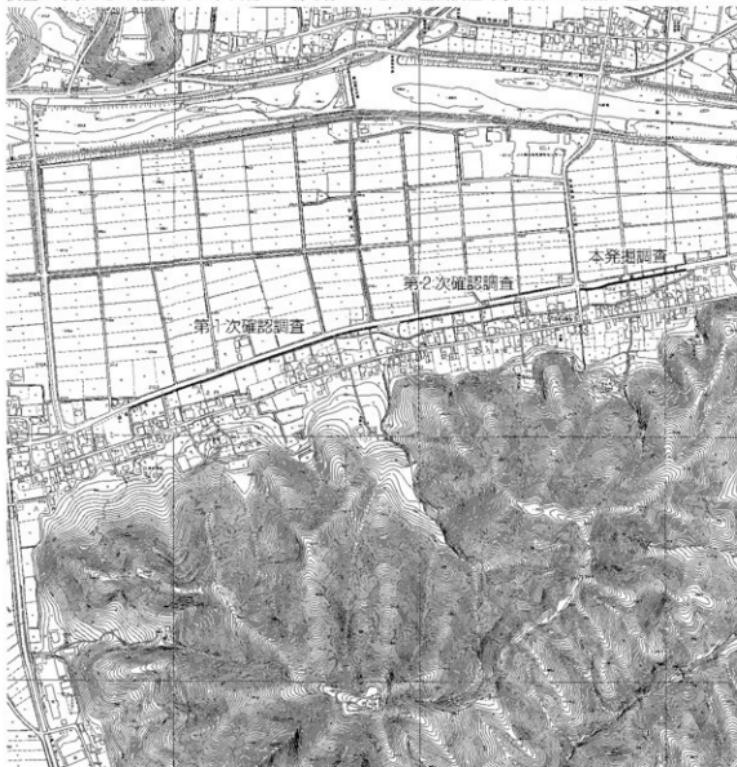
第2章 調査に至る過程

第1節 確認調査

一般国道372号線交通安全施設等整備工事に伴い、平成6年度と平成7年度の2ヶ年にわたり、計3次の確認調査を実施した（第6図）。

1. 第1次確認調査

今回報告する全面調査のきっかけとなった確認調査である。平成6年5月25日と26日の2日にわたって実施した。延長約216mを調査対象とし、トレンチを12箇所に設置し、調査をおこなった。調査の結果、鎌倉時代前半を中心とした遺構・遺物が調査対象とした全域で確認された。このため、当該確認調査の対象とした範囲の中で、西側の一部を除いた地域が全面調査対象範囲との結論に至った。



第6図 調査位置

2. 第2次確認調査

調査対象地は、第1次確認調査対象地域の約80m西側の地区である（第6図）。平成6年10月5日に実施した。延長約280mを対象とし、トレンチを9箇所に設定し（第8図）、調査を行った。

各トレンチで旧耕作土以外に認められた層は、洪水に伴う砂疊層からなり、遺構・遺物は全く確認されなかった。この結果、当地区については、全面調査を実施する必要はないとの結論に至った。

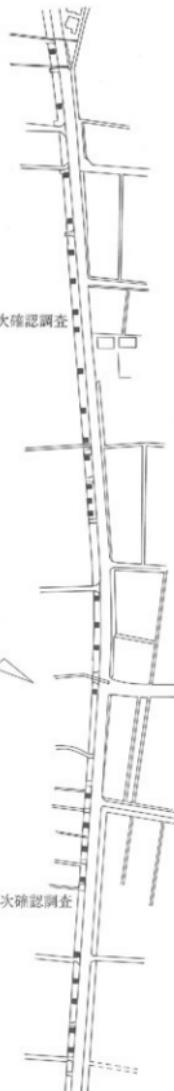
3. 第3次確認調査

第2次確認調査対象地のさらに西側の地区である（第6図）。平成7年10月4日から6日にかけて実施した。延長約540mを調査対象とし、トレンチを19箇所に設定し（第8図）、調査を実施した。

各トレンチで認められた層は、第2次確認調査同様、洪水に起因する堆積層からなり、遺構・遺物は全く認められなかった。このため、当地区についても、埋蔵文化財の包蔵は認められず、全面調査を実施する必要はないとの結論に至った。



第7図 確認調査



第8図 第2次・3次確認調査

第2節 全面調査

調査対象地は東西165mあるが、この間に里道が2箇所で横断する。これらの里道は工事では大きく改変しないため、調査対象外とした。このため、調査地は3地区に分割されることになった。そこで、西側からI区・II区・III区と呼称して調査を進めていった（第9図）。

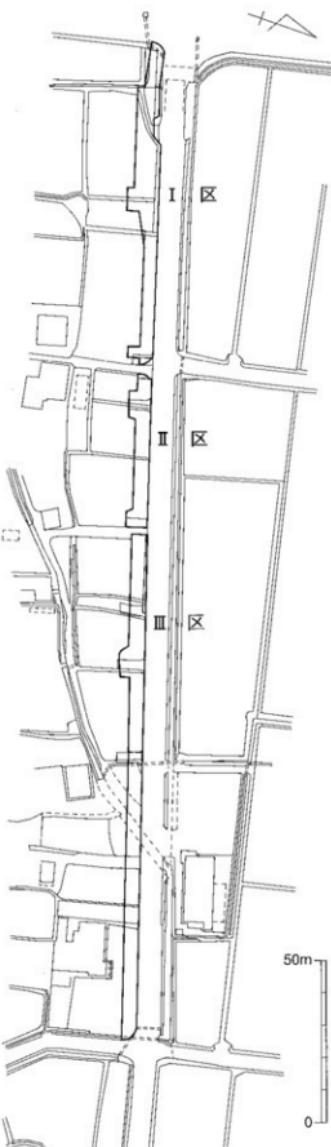
なお、I区・II区・III区各地区の調査面積は、それぞれ496m²・353m²・295m²を測り、計1144m²を調査対象とした。

第3節 整理作業

平成13年度から14年度にかけて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて行った。平成13年度には、出土土器の接合・実測を行った。平成14年度には土器の復元・写真撮影・製図・トレース・原稿執筆・報告書の纏集作業を行った。

上記作業にあたっては、平成13年度は、同事務所嘱託員 岸野奈津子・松本嘉子・島田瑞里・香川フジ子・西口由紀・木村淑子・藏 純子・鈴木まき子・中西睦子・宮野正子・大仁克子・早川由紀が担当した。

また、平成14年度は、岸野奈津子・香川フジ子・西口由紀・島田順子・木村淑子・前田千栄子・鈴木まき子・中西睦子・宮野正子が担当した。



第9図 地区割

第3章 調査の結果

第1節 調査結果の概要

1. 基本層序と遺構の検出

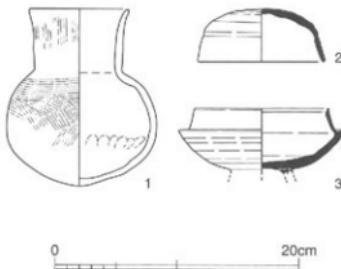
I区～III区の層序は基本的に同じである。遺構検出面は1面で、耕土層下面がこの面にあたる。遺構検出面下は基盤層となり、黄灰色砂疊層（I区）～砂質シルト層（III区）からなる。左記の層相から判断して、基盤層はI区からIII区にかけての洪水中に起因して形成されたものと考えられる。

この基盤層内からは、古墳時代を中心とした土器が少ないながらも出土している（第10図）。1は、直口壺で、口縁部を除いてほぼ完存する。口縁部は、内外面をハケ調整により仕上げられ、その後端部を横ナデ調整により仕上げられている。体部は外面下半をナデ調整、外面上半をハケ調整、内面を指オサエとナデ調整により仕上げられている。布留式段階に位置付けられる土器と考えられる。

2は、須恵器の蓋であり、ほぼ完存する。天井部外面はヘラ削りにより、他は回転ナデにより仕上げられている。7世紀初頭の土器と考えられる。

3は、須恵器の高杯であるが、脚部を欠く。口縁端部の特徴から、6世紀前半の土器と考えられる。

以上から、当遺跡の基盤層は古墳時代後半以降に形成されたものと考えられる。



第10図 基盤層出土土器

2. 調査の概要

I区～III区で遺構を検出したが、大半はIII区に集中する。時期の特定できる遺構は、大きく鎌倉時代前半と室町時代後期の2時期に限られる。ただし、大半の遺構は、鎌倉時代前半のものである。柱穴・土坑・溝状遺構を検出している。室町時代の遺構はわずかで、III区で検出された溝状遺構に限られる。他に、江戸時代に埋没する旧河道をI区で検出している。

遺物は、遺構の検出状況を反映して、鎌倉時代のものがほとんどである。大半が瓦器碗である。特筆すべき遺物としては、石製長方硯が出土している。室町時代の遺物は、丹波焼に限られる。



第11図 調査風景

第2節 I区の調査結果

概要

当調査区で検出された遺構は、西端部で検出された旧河道と、東部で検出された数穴の柱穴に限られる。柱穴については、遺物を伴わないため、時期の特定は困難である。ここでは、遺物が若干出土した旧河道について報告する。

旧河道

調査区西部を南西—北東方向に斜行する。南東側肩部を検出したのみで、全体を検出することはできなかった。少なくとも、幅は30m以上と推定される。横断面は逆台形を呈するものと考えられ、最深部における検出面からの深さは1.10mを測る。

埋土は3層からなる（上から、黄橙色シルト質極細砂・黄褐色シルト質極細砂・灰色シルト）。層相から判断して、下の2層は自然堆積によるものと考えられるが、最上層は人為的に埋められた層と考えられる。上層から出土した遺物の出土から、17世紀にはほぼ完全に埋没したものと考えられる。

なお、旧河道を検出した地区は、第1章で復元した微地形図（第4図）を参照すると、篠山川により形成された氾濫原面にあたる。したがって、旧河道については、その南東側肩部を検出した可能性も考えられる。

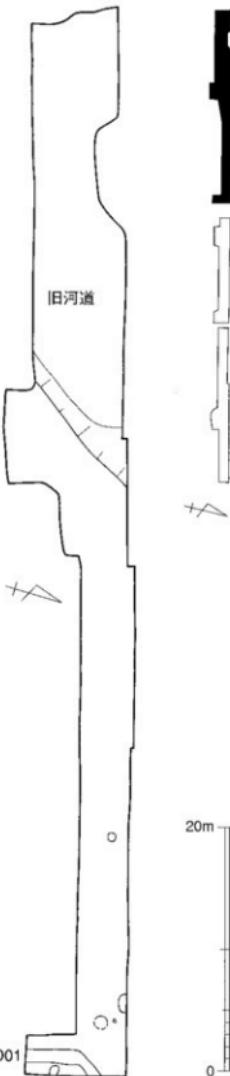
SD01

調査区の東端部で検出した。く字形に屈曲する溝で、両端とも調査区外へのびている（第13図）。検出面における幅1mを測り、延長5.2m検出した。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。この溝は、黒褐色シルト混じり極細砂～細砂1層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

その他

遺構に直接伴うものではないが、遺構検出面より上の層から、丹波焼壺1点と（4）丹波焼擂鉢2点（5・6）が出土している（第14図）。当遺跡の消長を検討するうえで、欠かすことのできない資料と考えられることから、これらの遺物について報告する。

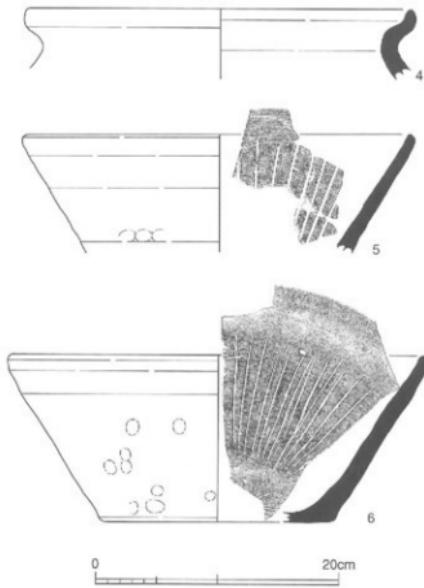
4は壺の口縁部片で、口径31.3cmを測る。口縁部は短い頸部から外反して立ち上がり、上方につまんでいる。5は、口径31.1cmを測る。体部が直線的に立ち上がり、口縁部外面には面をもつ。



第12図 I区平面図



第13図 S D O 1



標目は1本引きで間隔がやや広い。
形態からこの2点の時期は16世紀と
考えられる。

6は全形を知ることができる個体
である。法量は口径33.5cm、器高13.
7cm、底径19.7cmを測る。直線的に開
く体部をもち、口縁部は上方につま
んですんなりおえる。標目は1本引
きで間隔はやや広い。形態から時期
は16世紀と考えられる。

第14図 I 区出土遺物

第3節 II区の調査結果

概要

当地区においては、遺構は、調査区の西側と東側に偏在して検出されている。主な遺構は、柱穴と土坑であるが、遺物を伴う遺構はわずかである。このため、時期を特定できる遺構はほとんど認められない。

1. 柱穴

調査区の東西両端部で検出されている。特に、最も遺構が多く検出されたⅢ区に近い東端部において、集中している。ただし、いずれの柱穴からも、時期を特定できるような遺物は出土していない。ただし、後述するⅢ区で検出された鎌倉時代前半の柱穴の埋土と特徴を同じくすることから、ほぼ同時期の遺構と考えたい。

2. 土坑

SK06

調査区西部で検出された。SK07の北側に隣接する。SK07とは、工事による削平のため、検出面のレベルに顕著な段差が認められる。このため、両遺構間の切り合い関係の有無については明確にできない。平面形は楕円形を呈し、その規模は $1.30m \times 1.65m$ を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは35cmを測る。埋土は、上から黒褐色細砂～極細砂・褐灰色シルト質細砂の2層からなる。

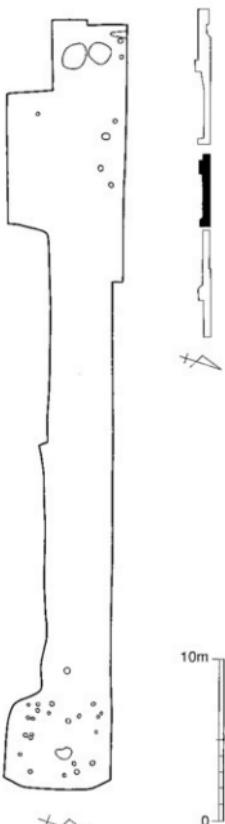
遺物は、須恵器の壺の体部片と、ふいごの羽口が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器の壺の特徴から判断して、鎌倉時代前半を中心とした時期が考えられる。

SK07

調査区西部で検出された。SK06の南側に隣接する。先述したように、SK06との切り合い関係の有無については明確にできない。

平面形は楕円形を呈し、その規模は $1.35m \times 1.75m$ を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。当遺構は、工事により削平を受けていることから、当初はより深かつたものと考えられる。埋土は、上から、褐灰色砂質シルト・青灰色シルトの2層からなる。

当遺構に伴う遺物は全く出土していない。このため、遺構の時期を特定することはできない。



第15図 II区平面図

第4節 III区の調査結果

1. 概要

今回報告するなかで、最も多くの遺構が検出された地区である。遺物も比較的多く出土しており、出土遺物から判断して、鎌倉時代前半と室町時代の遺構に分けることができる。以下、同時代にわけて報告する。

2. 鎌倉時代の遺構と遺物

柱穴・土坑・溝が検出されている。柱穴については、多数検出することができたが、建物を復元することはできなかった。ただし、土器が比較的まとまって出土しているため、出土遺物を中心に報告する。

(1) 柱穴

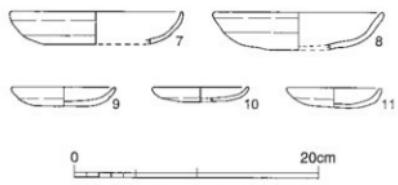
P 07 (第21図)

土師器と須恵器が出土している。須恵器については楕が出土しているが、小片のため図化できなかった。

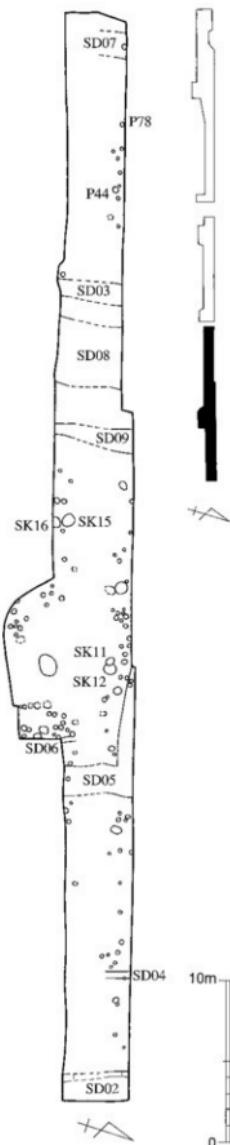
土師器は、大皿1個体が出土している。口縁部を1段の横ナデ調整、底部外面をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。底部内面はナデ調整により仕上げられている。

P 10 (第16図)

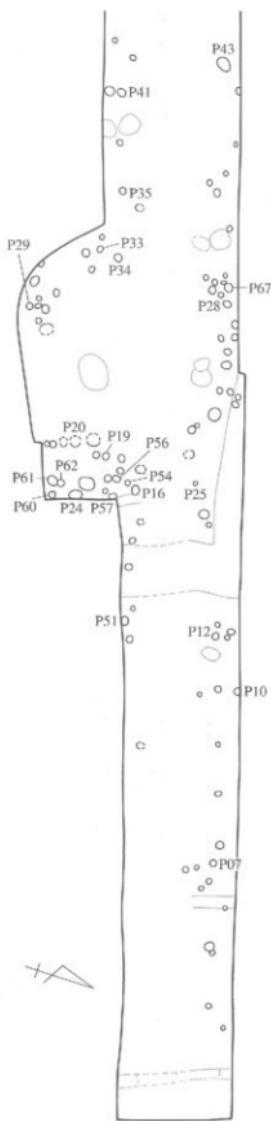
土師器の大皿と小皿が出土している。大皿は2個体図化したが、両個体とも口縁部を2段の横ナデ調整により仕上げ、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。小皿は3個体図化したが、3個体とも口縁部を1段の横ナデ調整により、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。



第16図 P 10出土土器



第17図 III区平面図



第18図 東半部柱穴位置図

P 12 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。土師器については杯の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦器は楕の口縁部を中心とした個体(44)が出土している。口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられている。内面にわずかに暗文が観察できる。観察できた範囲では、比較的密に施されている。

P 16 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。土師器は小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦器は楕が2個体出土している。このなかで47は口縁部から底部まで残存する個体で、底部には断面三角形を呈する高台が貼り付けられている。ただし、高台高はわずか2mmである。口縁部は2段の横ナデ調整、体部は指オサエにより仕上げられている。内面に暗文が観察できるが、その密度は粗く施されている。

42も47とはほぼ同様の特徴を有するが、口縁部の器壁は厚く仕上げられている。



第19図 P 16

P 19 (第21図)

土師器の小皿（30）が出土している。口縁部は強い1段の横ナデ調整により仕上げられている。このため、体部との境は明瞭な段となっている。体部から底部にかけては指オサエとナデ調整により仕上げられている。また、内面には煤の付着が認められ、灯明皿として使用されていたものと考えられる。

P 20 (第21図)

土師器・須恵器・瓦器が出土している。土師器は鍋の体部片と小皿の小片が、瓦器は椀の体部と底部片が出土しているが、いずれも図化できなかった。

須恵器は捏鉢（51）が出土している。体部の立ち上がり方向に対して直交する方向に強いナデを施し、両側に大きく拡張させている。

P 24 (第20図)

土師器・須恵器・瓦器・丹波焼の各器種が出土している。

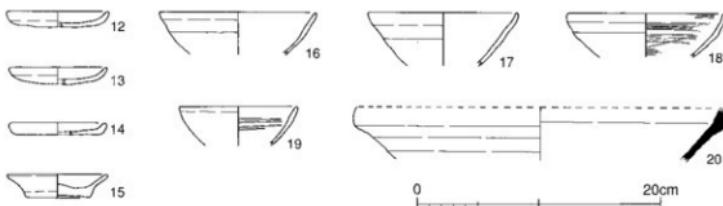
土師器は小皿と杯が出土しているが、杯については小片のため図化できなかった。小皿は4個体図化したが、底部を指オサエにより仕上げるタイプ（12～14）と、ナデ調整により仕上げるタイプ（15）からなる。口縁部は両タイプとも1段の横ナデ調整により仕上げられている。また、14については、内面の付着物から、灯明皿として使用されていたようである。

瓦器は椀のみが出土しており、4個体を図化した。いずれも底部まで残存するものはなく、全体の形態的特徴を明らかにすることはできない。口縁部内外面は横ナデ調整により、以下の外面は指オサエにより仕上げられている。横ナデ調整は、19が1段による以外は、2段で施されている。暗文が認められたのは18と19の2個体で、内面に限られる。その施文は密ではない。他の2個体については、内外面とも暗文は観察できなかった。

須恵器は捏鉢の口縁部片を図化した。口縁部は玉縁状を呈するが、端部を欠く。この他、丹波焼については小片のため図化できなかったが、壺の体部片が出土している。

P 25 (第21図)

瓦器椀が出土している。2個体図化した（41・43）が、両個体とも口縁部から底部まで残存する。両個体とも底部には断面逆台形を呈する高台が貼り付けられ、口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられている。また、暗文は内面にのみ観察できる。



第20図 P 24出土土器

P 2 8 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。土師器については、大皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦器は楕の底部片（48）が出土している。底部には断面三角形の高台が貼り付けられ、高台高は3mmを測る。内面見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。体部外面はユビオサエにより仕上げられている。

P 2 9 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。ただし、土師器は小皿が出土しているが図化できなかった。

瓦器は、楕と小皿が出土しているが、図化できたのは小皿1個体（34）のみである。口縁部は1段の横ナデ調整、他はナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められない。

P 3 3 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。土師器は大皿と甕の口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

瓦器は楕と小皿が出土しているが、楕については小片のため図化できなかった。小皿（36）は、口縁部が1段の横ナデ調整、他が指オサエとナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められない。

P 3 4 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。土師器は、小片のため、図化どころか器種の特定も困難である。

瓦器は、楕（39）が出土している。口縁部を内側に折り返すような1段の横ナデ調整により仕上げられている。体部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。内外面とも暗文は認められない。

P 3 5 (第21図)

土師器の小皿と大皿が出土しているが、小皿については小片のため図化できなかった。大皿（26）は、口縁部が1段の横ナデ調整により上方につまみあげられている。他はナデ調整により仕上げられている。

P 4 1 (第21図)

土師器・須恵器・瓦器が出土している。須恵器は器種不明の小片が、瓦器は楕の口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器は小皿と大皿が出土しているが、小皿については小片のため図化できなかった。大皿（29）は、口縁部を1段の横ナデ調整、他はナデ調整により仕上げられている。

P 4 3 (第21図・第28図)

土師器・須恵器・瓦器・丹波焼が出土している。須恵器は甕の体部片が、瓦器は器種の特定できない小片が出土しているが、いずれも図化できなかった。

土師器は小皿が出土している。小皿（32）は、口縁部が1段の横ナデ調整、他が指オサエとナデ調整により仕上げられている。口縁端部を中心に煤の付着が認められ、灯明皿として使用されていた可能

性が考えられる。

丹波焼は、80の擂鉢で、体部の破片である。擂目は1本引きで内面には落印が刻される。16世紀の製品と考えられる。

P 4 4 (第21図)

土師器と瓦器が出土しているが、瓦器については、小片のため図化どころか器種の特定も困難である。土師器は小皿・大皿・鍋が出土しているが、大皿・鍋については小片のため図化できなかった。小皿(37)は、口縁部が1段の横ナデ調整、他はナデ調整により仕上げられている。

P 5 1 (第21図)

瓦器の小皿(38)が出土している。口縁部は1段の横ナデ調整、他はナデ調整により仕上げられている。外面とも摩滅のため、暗文の有無を明確にすることは困難である。

P 5 4 (第21図)

土師器・須恵器・瓦器が出土している。

土師器は大皿(31)が出土している。口縁部を1段のナデ調整により、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

須恵器は捏鉢の口縁部を中心とした小片(52)が出土している。口縁内縁部をつまむようなナデ調整により外端面をもつ。

瓦器は楕1個体(46)が出土しているが、口縁部を欠く。底部には断面三角形を呈する高台が貼り付けられている。内面にわずかに暗文が観察される。

P 5 6 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。瓦器は楕の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器は大皿が1個体(28)出土している。口縁部は1段のナデ調整により、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

P 5 7 (第21図)

土師器と瓦器が出土している。土師器は、大皿・小皿・鍋が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

瓦器は、楕の底部片(49)が出土している。断面長方形を呈する高台が、内縁面のみが接地するよう貼り付けられている。内面に暗文が観察されるが、比較的密に施されている。また、見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。

P 6 0 (第21図)

土師器・須恵器・瓦器が出土している。土師器については、小皿と大皿が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

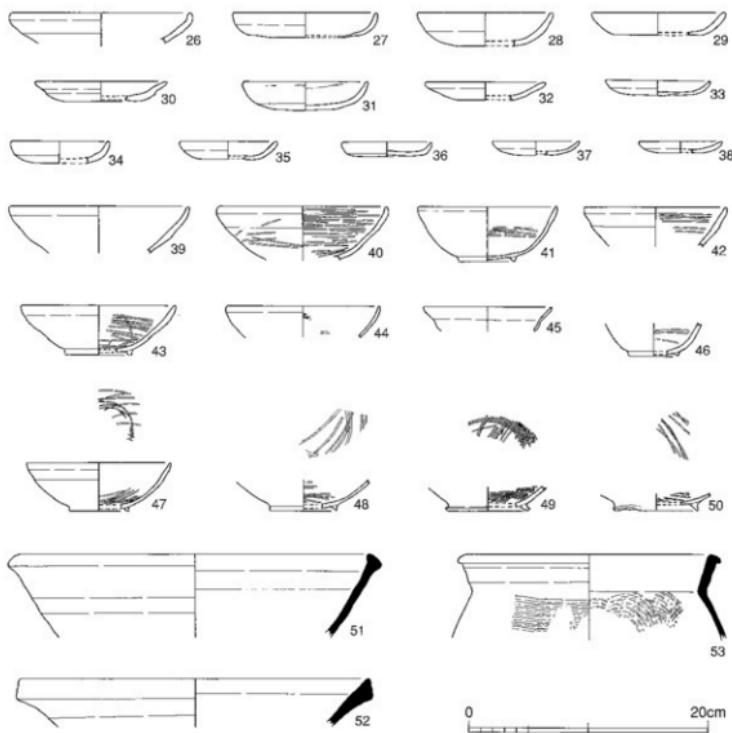
須恵器は楕(53)が出土している。口縁部は内外面を横ナデ調整、体部外面は叩き成形により仕上げられ、体部内面には叩き成形に伴う同心円文が認められる。このような土器については、多くは土師

器として出土するものであるが、この土器に関しては還元焼成されている。このため、本報告では須恵器として報告する。

瓦器は、楕の底部片（50）が出土している。断面三角形を呈する高台が貼り付けられている。見込みから体部にかけて暗文が観察されるが、密ではない。

P 6 1 (第21図)

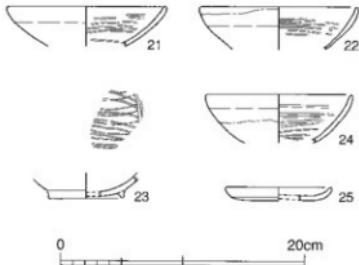
土師器・須恵器・瓦器が出土している。土師器については、小片のため、固化どころか器種の特定も困難である。須恵器は壺の体部片が出土している。



26-P35 27-P07 28-P56 29-P41 30-P19 31-46-52-P54 32-P43 33-P62
34-P29 35-P78 36-P33 37-P44 38-P51 39-P34 40-45-P61 41-43-P25
42-47-P16 44-P12 48-P28 49-P57 50-53-P60 51-P20

第21図 III区柱穴出土土器

瓦器は椀が2個体分出土している（40・45）。両個体とも底部を欠く。40は、口縁部を2段の横ナデ調整により仕上げられている。他を指オサエとナデ調整により仕上げられている。外面に暗文が施されているが、外面のはうはわずかで、内面についても密とは言い難い。45は、口縁部を横ナデ調整により仕上げられるが、内湾傾向にあり、体部とは明確に区別される。外面とも暗文は施されていない。



第22図 P 6 7 出土土器

P 6 2 (第21図)

土師器と瓦器が出土しているが、瓦器については、小片のため固化どころか器種の特定も困難である。

土師器は小皿（33）が出土している。口縁部を1段のナデ調整により、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

P 6 7 (第22図)

瓦器と土師器が出土している。

瓦器は椀と小皿が出土しているが、小皿については小片のため固化できなかった。椀は4個体固化したが、口縁部から底部まで残存するものはない。このため、全体の形態的特徴を明らかにすることはできない。口縁部外面は、1段（21・24）もしくは2段（21）の横ナデ調整により仕上げられ、以下外面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。暗文はいずれも内面のみで、密ではない。底部は、断面三角形をなす高台が貼り付けられている。内面はジグザグ状の暗文が施されている。この後、体部にかけて圓線状の暗文が施されている。

土師器は小皿のみが出土しており、固化できたのは25の1個体のみである。口縁部は1段の横ナデ調整、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

P 7 8 (第21図)

土師器と丹波焼が出土している。丹波焼は壺の体部小片が出土している。

土師器は小皿（35）が出土している。口縁部は1段の横ナデ調整、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

(2) 土坑

SK11

調査区のほぼ中央部で検出された。SK12と切り合い関係にあり、SK12を切っている。このため完存する。平面形は楕円形を呈し、検出面における規模は62cm×45cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。埋土は、灰褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

遺物は、土師器の小皿と瓦器の椀底部が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

SK12 (第24図)

調査区のほぼ中央部で検出された。SK11と切り合い関係にあり、SK11に切られている。このため一部を欠く。平面形は楕円形を呈し、検出面における規模は62cm×70cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。埋土は、灰褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

遺物は、土師器と瓦器が出土している。土師器については小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦器は、椀1個体を図化した(58)。口縁部を中心とした個体で、口縁部は2段の弱い横ナデ調整により仕上げられている。体部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。暗文は内外面で観察でき、両面とも比較的密に施されている。

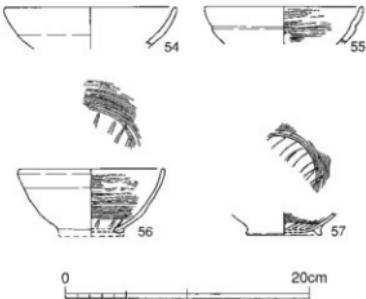
SK15

調査区のほぼ中央部で検出されている。SK16の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形を呈し、検出面における規模は80cm×70cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。埋土は、灰褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

土師器と瓦器が出土しているが、土師器は小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦器は椀のみが出土しており、4個体を図化した(第23図)。口縁部から底部まで残存するのは56の1個体のみであるが、高台端部を欠く。

おそらく断面三角形を呈するものと考えられる。口縁部は弱い2段の横ナデ調整により仕上げられている。体部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。暗文が観察できるものは、いずれも内面に施されている。なかでも、56は比較的密に暗文が施されている。また、見込みの暗文が観察できる個体は、いずれもジグザグ状に施されている。



第23図 SK15 出土土器

SK16

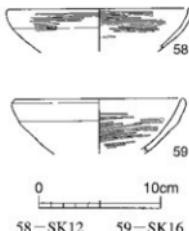
調査区のほぼ中央部で検出された。SK15の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、当土坑の約1/2以上は調査区外に広がっている。このため当遺構は完存しない。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、長軸方向で58cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面

からの深さは13cmを測る。埋土は、灰褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

土師器・須恵器・瓦器の各器種が出土している。このなかで、土師器は器種の特定できない小片が、須恵器は壺の体部小片が出土しているが、図化できなかった。

瓦器は、碗が出土している(59 第24図)。口縁部から体部にかけての個体で、口縁部は2段の横ナデ調整により肥厚気味に仕上げられている。

体部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。暗文は内面に観察でき、両面とも比較的密に施されている。



第24図 III区出土土器

(3) 溝

S D 0 3

調査区西半部で検出された。SD08の西側に位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向にのびる溝で、SD08とほぼ平行する。大半を工事により削平されていたが、3.95m検出することができた。検出面における幅1.35mを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における遺構検出面からの深さは20cmを測る。遺構内は黄灰色シルト質極細砂1層の堆積からなる。

遺物は、土師器と瓦器が出土しているが、瓦器については小片のため同化どころか、器種の特定も困難である。

土師器は、小皿1個体(74 第27図)が出土している。口縁部は1段の横ナデ調整により仕上げられ、底部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。内面に煤状の付着物が認められ、灯明皿として使用されていた可能性も考えられる。

S D 0 4

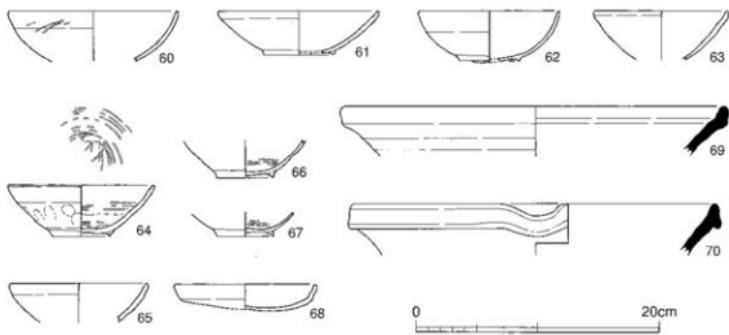
調査区東半部で検出された。SD02の西側に位置するが、柱穴に切られている以外は、他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向にのびる溝で、SD02とほぼ平行する。大半を工事により削平され、この箇所より北側で検出され、その長さは1.60mを測る。検出面における幅50cmを測る。横断面は緩やかなU字形を呈し、最深部における遺構検出面からの深さは15cmを測る。遺構内は灰褐色シルト質極細砂1層の堆積からなる。

遺物は、土師器の小皿、須恵器の壺の体部片、瓦器の碗の底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

S D 0 5

調査区のほぼ中央部で検出された。平面的には数穴の柱穴と重複しているが、明確な切り合い関係を確認することはできなかった。ほぼ東西方向から南北方向に難形に屈曲する溝である。東西方向で5.20m、南北方向で2.95m検出することができた。南北方向については、検出面における幅1.85mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における遺構検出面からの深さは20cmを測る。

東西方向については、北側肩部が調査区外にのびるため、その規模を明確にすることはできない。横断面は逆台形に近いものと考えられ、検出範囲での最大幅90cm、最深部での深さは38cmを測る。遺構



第25図 SD05出土土器

内は、上から黒褐色シルト質極細砂～細砂、灰色極細砂質シルトの2層の堆積からなり、自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は、瓦器・土師器・須恵器・丹波焼の各器種が出土している（第25図）。

瓦器は楕のみが出土している。口縁部から底部まで残存するのは61・62・64の3個体で、暗文が観察できるのは64の1個体のみである。見込みを含めて、内面のみに粗く暗文が施されている。61と62については、摩滅が著しく暗文の観察はできない。底部は、底部のみ残存する66と67を含めて、断面三角形の高台が貼り付けられているが、高台高2mmとわずかである。口縁部は、口縁部のみ残存するものも含めて、いずれも横ナデ調整により仕上げられているが、1段によるものと2段によるものとに分類できる。この他、60については、外面に暗文がわずかではあるが観察できる点が注目される。

土師器は大皿と小皿が出土しているが、小皿については小片のため図化できなかった。大皿は、68の1個体のみである。口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられ、他はナデと指オサエにより仕上げられている。

須恵器は捏鉢が出土しており、2個体図化した（69・70）。いずれも口縁部のみ残存する。69は口縁部を上方に拡張し、玉線状を呈する。70は口縁部を下方に拡張し、端面をもつ。

丹波焼は、鉢と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

SD06

調査区中央部で検出された。SD05の西側に位置する。ほぼ南北方向にのびる溝で、工事による削平箇所より南側に限って検出された。検出された長さは85cmである。検出面における幅38cmを測り、横断面は直形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか5cmである。

土師器と瓦器が出土しているが、土師器は小片のため図化どころか、器種の特定も困難である。

瓦器は、楕が出土している。底部のみの残存で、断面逆台形を呈する高台を貼り付けている。内外面の暗文は観察できない。

SD07

調査区西端部で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向にのびる溝であるが、工事による削平が顕著で、検出されたのはわずか80cmにすぎない。検出面における幅1.6mを

測る。横断面は皿形を呈し、最深部における遺構検出面からの深さは15cmを測る。遺構内は灰褐色シルト質極細砂1層の堆積からなる。

遺物は、青磁碗と石製長方硯が出土している（第26図）。

青磁碗（71）は底部のみの残存で、底部外面の一部を除いて釉が付着している。内面見込みには印花紋が印刻されている。

硯（72）は長方硯に分類されるもので、海部を中心に%弱残存する。幅4.9cmを測り、長さは4.4cm残存する。海部と陸部の比高はわずか1mmで、縁帯部上面と海部の比高は2mmを測る。縁帯部外側のラインは長方形を呈するが、内側のラインは梢円状を呈している。その幅は、側部で3mm、海部側で5mmを測る。また陸部における厚さは7mmである。陸部を中心に使用痕が顕著に認められる。

SD08

調査区西半部で検出された。SD03の東側、SD09の西側に位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向にのびる溝で、SD03・SD09とはほぼ平行する。大半を工事により削平されていたが、4m検出することができた。検出面における幅3.7mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における遺構検出面からの深さは35cmを測る。遺構内は灰褐色シルト質極細砂1層の堆積からなる。

遺物は出土していない。

SD09

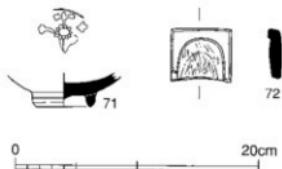
調査区西半部で検出された。SD08の東側に位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。ほぼ南北方向にのびる溝で、SD08とはほぼ平行する。大半を工事により削平されていたが、4.8m検出することができた。検出面における幅65cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における遺構検出面からの深さは13cmを測る。遺構内は灰褐色シルト質極細砂1層の堆積からなる。

遺物は、土師器と瓦器が出土地している。ただし、土師器については煤の付着した鍋の体部片が出土しているが、小片のため固化できなかった。

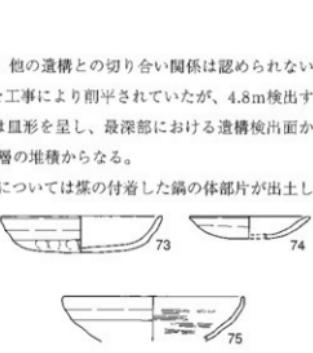
瓦器は口縁部を中心とした個体（75 第27図）であるが、口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられている。他は、ナデ調整と指オサエにより仕上げられている。体部内面には暗文がわずかに観察できる。

SD13

遺物は、土師器の大皿1個体（73 第27図）が出土している。口縁部は2段の横ナデ調整、底部はユビオサエにより仕上げられている。底部内面はナデ調整により仕上げられている。



第26図 SD07出土遺物



第27図 溝出土土器

3. 室町時代以降の遺構と遺物

当該期の遺構はSD02に限られる。

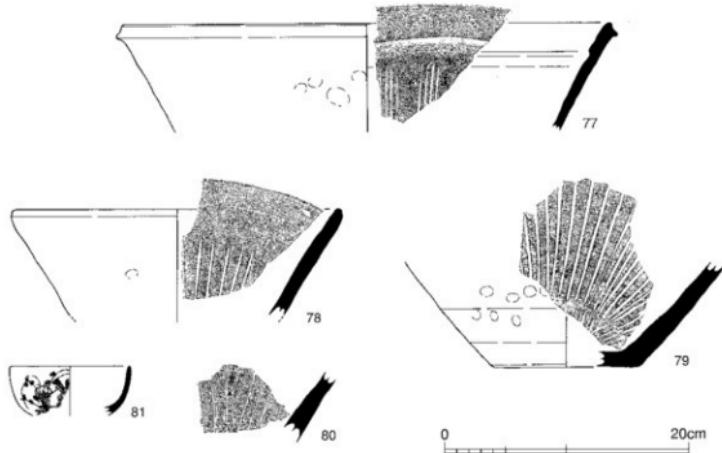
SD02

調査区東端部で検出した。ほぼ南北方向にのびる溝である。横断方向については全体を検出することはできず、東側肩部は調査区外にあたる。検出した規模は、長さ5m、幅1.80mを測る。横断面は逆台形を呈するものと考えられ、最深部における検出面からの深さは40cmを測る。埋土は灰色シルト質極細砂～細砂1層からなる。溝の西側、底部から肩部のかけての傾斜変換部には、このラインには平行するように、杭列が認められた。

遺物は、丹波焼擂鉢2点が出土した。77は口径39.7cmで、口縁部が断面四角形を呈する個体である。内面口縁部下方に強いナデによる凹線状の窪みをもつ。体部は直線的に開き、外面には指頭痕跡を顕著に残し、擂目は4本単位の櫛状工具を用いる。形態から17世紀前半の製品と考えられる。78は口縁を丸くおえるもので、体部中位をかるく外反させる。擂目は間隔の広い一本引きであるが、口縁部付近にはおよばない。口径は26.3cmを測る。形態から時期は16世紀と考えられる。

その他

遺構に伴わない遺物として、丹波焼と染付磁器が出土している79は丹波焼擂鉢である。底部から体部にかけての個体で、擂目は1本引きである。底径は12.4cmを測る。口縁部を欠くため詳細は不明であるが、胎土などから16世紀代の製品と考えられる。81は染付磁器で、伊万里系の小型丸碗である。口径9.7cmで外面に草花文を描く製品である。



第28図 III区包含層出土土器

第4章 まとめ

第1節 鎌倉時代の土器について

当該期の土器としては、瓦器・須恵器・土師器が出土している。これらの土器の特徴について、若干の検討を加えてみたい。特に、量的には最も多く出土しており、当遺跡の位置する丹波地域において編年的研究が比較的進んでいる瓦器を中心に、その時期・地域性について若干の検討を加えてみたい。

1. 瓦器の分類と検討

瓦器については、その編年研究において、暗文の施文方法・法量（口径と器高の比）・高台の形状などが、主要な視点となっている。特に、暗文を外面に施す段階と施さなくなる段階の間に大きな二期が設定されている。

このような視点でみると、当遺跡出土の瓦器において、内外面に暗文を施すタイプと施さないタイプが認められる。そこで、前者をAタイプ、後者をBタイプとして、大きな分類としたい。また、小片での出土が多いことから、暗文の観察ができないものも認められる。これを便宜的にCタイプとする。なお、Cタイプについては、完形もしくは完形に近い個体についての観察をもとにした分類ではなく、小片を対象とした観察であるため、確実に暗文がないものとは断定しがたい状況であることを断っておきたい。

まず、確実にAタイプに分類できるのは、SD05出土の60、SK12出土の58、P61出土の40の3個体に限られる。いずれも、口縁部から体部にかけての個体で、底部まで残存するものはない。これらの土器が、当該期の土器のなかで最も古く位置付けられるものと考えられる。ただし、SD05については、他の共伴する土器を検討すると、60の瓦器碗の示す年代観より新しく位置付けられるものが少なからず認められる。したがって、SD05については、少なからず時期幅を有するものと考えたい。他の58と40の2個体については、外面の暗文の密度から判断して、58→40の変遷が考えられる。58については、共伴土器がないため、土器そのものの年代観から、12世紀後半に位置付けられるものと考えられる。40については、後述するCタイプの瓦器碗と共伴していることから、13世紀代に下るものと考えられる。

Bタイプの瓦器碗については、口縁部から底部まで残存する個体（B a）は56・43・64・41・47の5個体出土している。これらの上器を中心検討する。これら5個体に共通して、内面の暗文は比較的密に施され、その密度はほぼ同程度である。高台の断面形については、43が逆台形に近い形状を呈する以外は、逆三角形を呈する。以上から、これらの土器の示す年代観には大きな差は認められないものと考えられる。特に、内面の暗文が比較的密に施されていることから、13世紀前半～中頃と考えられる。

次に、口縁部から底部まで残存しないBタイプの瓦器碗（B b）について検討する。これらの一派のなかで、特徴を異にするものとして、19・22・24・42・59を指摘することができる。これらの特徴として、底部まで残存しないため推測の域をでないが、口径に対して器高が高い点が指摘できる。加えて、口径そのものが小さく、小型である。また、暗文の密度も若干粗くなっている。したがって、これらの特徴を有する瓦器碗については、B aよりも時期が下るものと考えられ、13世紀後半に位置付けられる。さらに19が出土したP24出土の共伴土器から判断して、14世紀前半まで下るものも認められる。なお、一見したところ、56についても当タイプの可能性も考えられるが、わずかな残存状況からの復

		瓦 器		
		椀 A	椀 B	椀 C
I	SK12	 58		
	P61	 40		 45
	P10			
II	SD09	 75		
	P25	 43	 41	
	P67	 21	 24	
		 22	 23	
	SK15	 55	 56	
III	P54		 46	
	P60		 50	
	SD05	 60	 64	 65
	P24		 66	 63
			 67	
			 18	 19
				 16

第29図 主な一括資料

土 師 器

須 惠 器

大 盆

中 盆

小 盆

鍋

こね鉢



元であるため、その当否については保留させていただきたい。

最後にCタイプの瓦器碗についてであるが、口縁部から底部まで残存する個体は認められないが、16・65のように法量的にBbタイプに近いものと、39のようにBaタイプに近いタイプの二者が認められる。前者については、Bbタイプの中でさらに暗文が少ないもしくは暗文がないタイプと判断し、Bbに後続するものと考えたい。ただし、P24・SD05におけるCタイプとBbタイプの共伴例から判断して、大きな時期差はないものと考えられる。後者については、法量的にはAもしくはBaタイプに近いものと考えられるが、その位置付けについては明確にできない。

以上から、当遺跡出土の瓦器碗については、大きく3時期（第Ⅰ期～第Ⅲ期）に区分できることが明らかとなった。

そこで、瓦器碗を中心とした分類から導かれる年代観について、他の共伴資料と齟齬が認められるかどうか検討する。

P24については、先述したように、瓦器碗Bと瓦器碗Cが共伴しているが、同じく共伴する須恵器捏鉢の特徴から、先に検討した年代観と齟齬はないものと考えられる。

SD05出土資料についても、先の検討においては、時期幅の存在を考えたが、瓦器碗Aを除いては、須恵器捏鉢の示す年代観とはほぼ一致する。

最後に、当遺跡出土の瓦器碗の特徴について検討する。当遺跡が位置する篠山市は、当該期においては、「丹波型」瓦器碗の分布域にある。当タイプの瓦器碗の特徴として、橋本久和・伊野近富によって、①口径に対する底径の比率が大きい、②体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚し外面を強くなでる、③口縁端部内面には沈線は施されない等の特徴が指摘されている⁽¹⁾⁽²⁾。また、初田館跡の調査により多くの瓦器碗が出土しており、同じ丹波型のなかにも若干の差異が認められる点が指摘されている⁽³⁾。

以上において指摘されている特徴と比較して、当遺跡出土瓦器碗は、口縁部の肥厚が顕著でなく、端面をなすようなナデ調整も認められない。これは、西木ノ部遺跡（篠山市）・多利遺跡群（氷上郡春日町）で認められる特徴と一致するものである。

また、碗Bbおよび碗Cは、瓦器碗の最も退化したタイプと考えられ、当地域においてはあまり類例が明らかとなっていなかった時期のものである。当地域における、瓦器碗末期の状況を伺う上で、貴重な資料と考えられる。

2. 瓦器以外の遺物の検討

瓦器以外に特徴的な土器として、P60出土の土師器鍋（53）がある。当タイプの鍋については、「丹波型」もしくは「丹波・播磨原型鍋」と呼称されており⁽⁴⁾、13世紀から14世紀にかけて認められる。当タイプについては、硬質に焼かれる例が福知山を中心に出土例があるとされている。本書で須恵器として報告した53についても、この例に該当するものと考えられる。共伴する瓦器碗から13世紀中頃と考えられ、時期的にもほぼ一致する。以上から、当タイプの鍋を、丹波に特徴的な土器様相の一端を示しているものといえよう。

土師器のなかで最も多く出土しているのは皿類である。これらは、その法量から、大皿・中皿・小皿に分類することができる。これらの皿類については、1段ないし2段の横ナデ調整により口縁部が仕上げられているが、体部との境に明瞭な段差は認められない。他の器種との共伴例（P24・P54）を考慮に入れると、多くの皿類は第Ⅱ期もしくは第Ⅲ期に対応する時期のものと考えられる。

この他、当該期の土器様相の特徴として、初田館跡などで少なからず出土している須恵器碗が1点も認められない点である。調査範囲の限界も考える必要もあるが、一つの特徴として指摘できるのではないだろうか。

3. 小結

以上の検討をもとに、おもな一括資料を時期的にまとめたのが第29図である。

〔註〕

1. 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』(高槻市文化財調査報告書 第13冊)高槻市教育委員会 1980
2. 伊野近富「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第57号 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995
3. 岡崎正雄『初田館跡—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XIX）—』(兵庫県文化財調査報告書 第116冊) 兵庫県教育委員会 1992
4. 前掲（2）

第2節 総括

以下、今回の調査で明らかとなった点を列記し、本報告のまとめとしたい。

- ①八上上遺跡は、篠山盆地の南東部に位置する。当遺跡の微地形を観察すると、氾濫原面からわずかな段丘面上にかけて立地する。
- ②全面調査・確認調査を4次にわたり3地点で行ったが、遺構・遺物の包蔵が明らかとなったのは最も東側の地区のみである。逆にいうと、これ以外の地区には埋蔵文化財は包蔵されていないものと判断される。これは、八上城に伴う城下町の範囲を検討するうえで、大きな示唆を与えるものと考えられる。
- ③今回の調査で明らかになった遺構の大半は鎌倉時代前半に位置付けられるもので、当遺跡が鎌倉時代以降に形成されたことが明らかとなった。逆に、八上城に関連する時期（室町時代）の遺構・遺物はきわめて少ない。この点も、②同様、八上城に伴う城下町の範囲を検討するうえで、大きな示唆を与えるものと考えられる。
- ④鎌倉時代の遺構としては、柱穴・溝などを検出したが、調査範囲が限られていたため、建物の復元等なできなかった。
- ⑤鎌倉時代の遺物としては、瓦器碗の出土が目立つ。13世紀から14世紀にかけての資料が比較的多く認められ、当地域における瓦器碗の最末期の様相を検討するうえで、貴重な資料といえよう。

報告書抄録

ふりがな	やかみかみいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	八上上遺跡発掘調査報告書							
副書名	一般国道372号線交通安全施設等整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	兵庫県埋蔵文化財調査報告書 第250冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田清朝・山上雅弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2003年(平成15年)3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	調査番号					
やかみかみいせき 八上上遺跡	ひょうごけん 兵庫県 こうざんし 篠山市 やかみかみ 八上上	940187	35° 04' 07"	135° 15' 39"	19940606 ~ 19940617	1144	一般国道372号 線交通安全施 設等整備	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
八上上遺跡	集落跡	鎌倉時代	柱穴 溝 土坑		瓦器 土師器 須恵器 青磁 石製長方鏡			
			宋町時代		溝			丹波焼擂鉢

No.	種別	器種	出土遺構	残存状況	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
0 1	土師器	壺	基盤層	口縁部わずか・体部2/3	8. 0	1 4. 4	
0 2	須恵器	蓋	基盤層	口縁部3/5・天井部完存	1 0. 3	4. 3	
0 3	須恵器	高环	基盤層	口縁部3/5	1 0. 8	5. 4	
0 4	丹波焼	壺		口縁部1/8	3 1. 3	5. 7	
0 5	丹波焼	擂鉢		口縁部わずか	3 1. 1	9. 7	
0 6	丹波焼	擂鉢		口縁部わずか・底部1/8	3 3. 5	1 3. 7	1 9. 3
0 7	土師器	大皿	P 1 0	口縁部1/4	1 3. 9	2. 7	
0 8	土師器	大皿	P 1 0	口縁部1/4	1 3. 8	3. 0	
0 9	土師器	小皿	P 1 0	口縁部1/2弱	8. 4	1. 6	
1 0	土師器	小皿	P 1 0	口縁部1/4	7. 8	1. 2	
1 1	土師器	小皿	P 1 0	口縁部1/2	7. 6	1. 6	
1 2	土師器	小皿	P 2 4	口縁部1/2弱	8. 2	1. 3	
1 3	土師器	小皿	P 2 4	口縁部1/4	7. 9	1. 4	
1 4	土師器	小皿	P 2 4	口縁部1/4	7. 6	1. 0	
1 5	土師器	小皿	P 2 4	底部完存	8. 0	1. 9	5. 4
1 6	瓦器	椀	P 2 4	口縁部1/6	1 2. 8	3. 5	
1 7	土師器	椀	P 2 4	口縁部1/6	1 2. 2	4. 4	
1 8	瓦器	椀	P 2 4	口縁部1/4弱	1 2. 7	3. 6	
1 9	瓦器	椀	P 2 4	口縁部1/4弱	9. 6	3. 2	
2 0	須恵器	捏鉢	P 2 4	口縁部わずか	3 0. 0	4. 4	
2 1	瓦器	椀	P 6 7	口縁部1/7	1 2. 8	3. 3	
2 2	瓦器	椀	P 6 7	口縁部1/3	1 2. 7	3. 5	
2 3	瓦器	椀	P 6 7	底部1/4弱		2. 0	6. 0
2 4	瓦器	椀	P 6 7	口縁部1/4弱	1 1. 8	4. 0	
2 5	土師器	小皿	P 6 7	口縁部1/4	8. 6	1. 1	
2 6	土師器	大皿	P 3 5	口縁部1/7	1 4. 8	2. 5	
2 7	土師器	中皿	P 0 7	口縁部1/4	1 1. 8	2. 1	
2 8	土師器	中皿	P 5 6	口縁部1/5	1 1. 1	2. 8	
2 9	土師器	中皿	P 4 1	口縁部1/2	1 1. 0	1. 9	
3 0	土師器	中皿	P 1 9	口縁部1/9	1 0. 8	1. 6	
3 1	土師器	中皿	P 5 4	口縁部1/4	1 0. 2	2. 4	
3 2	土師器	小皿	P 4 3	口縁部1/4	1 0. 0	1. 5	
3 3	土師器	小皿	P 6 2	口縁部1/3弱	8. 6	1. 2	
3 4	瓦器	小皿	P 2 9	口縁部1/3	8. 0	1. 3	
3 5	土師器	小皿	P 7 8	口縁部1/4弱	7. 9	1. 5	
3 6	瓦器	小皿	P 3 3	口縁部~底部1/3強	7. 4	1. 2	
3 7	土師器	小皿	P 4 4	口縁部1/4弱	7. 1	1. 1	
3 8	瓦器	小皿	P 5 1	口縁部1/7	6. 8	0. 9	
3 9	瓦器	椀	P 3 4	口縁部1/4弱	1 4. 8	3. 9	
4 0	瓦器	椀	P 6 1	口縁部1/4	1 3. 9	4. 4	
4 1	瓦器	椀	P 2 5	口縁部1/7・底部1/4弱	1 1. 4	4. 6	4. 7
4 2	瓦器	椀	P 1 6	口縁部1/8	1 1. 7	3. 3	
4 3	瓦器	椀	P 2 5	口縁部1/8弱・底部1/4	1 2. 7	4. 1	5. 6
4 4	瓦器	椀	P 1 2	口縁部1/8	1 2. 0	2. 4	
4 5	瓦器	椀	P 6 1	口縁部1/4	1 1. 7	2. 0	
4 6	瓦器	椀	P 5 4	底部1/4		2. 8	4. 0
4 7	瓦器	椀	P 1 6	口縁部1/8・底部1/4弱	1 2. 0	4. 0	4. 8
4 8	瓦器	椀	P 2 8	底部1/3強		2. 6	5. 5
4 9	瓦器	椀	P 5 7	底部1/4弱		2. 1	6. 4
5 0	瓦器	椀	P 6 0	底部1/4		1. 5	6. 8
5 1	須恵器	捏鉢	P 2 0	口縁部わずか	2 9. 1	6. 9	
5 2	須恵器	捏鉢	P 5 4	口縁部わずか	2 8. 8	4. 0	
5 3	須恵器	鍋	P 6 0	口縁部1/7	2 0. 2	7. 0	

色調	胎土	備考	挿図	写真図版
橙			10	6
灰			10	
			10	
にぶい赤褐	1.5cm前後の砂粒含む		14	9
にぶい赤褐	2～3mm大の砂粒含む		14	
暗赤褐～にぶい赤褐	7mm以下の大砂粒多く含む		14	9
浅黄橙～灰白			16	6
浅黄橙			16	6
灰白～にぶい黄橙			16	6
橙			16	
灰白～にぶい黄橙		底部指オサエ	16	6
橙～にぶい赤橙		底部指オサエ	20	6
橙～にぶい橙		底部ゆびオサエ	20	
にぶい橙～橙		灯明皿	20	
橙		底部ナデ調整	20	
灰			20	
灰白			20	
灰～暗灰			20	
灰～暗灰			20	
灰			20	6
灰			22	6
灰			22	
灰			22	
灰			22	
燈		底部指オサエ	22	
明褐灰～灰白			21	
橙～褐灰		底部指オサエ	21	6
橙～にぶい橙		底部指オサエ	21	
灰白		底部ナデ	21	6
橙		灯明皿	21	
明褐灰～にぶい橙		底部指オサエ	21	
にぶい黄橙		灯明皿	21	
橙～にぶい橙		底部指オサエ	21	
灰白			21	
浅黄橙		底部指オサエ	21	
灰		底部指オサエ	21	6
明褐灰～にぶい橙		底部ナデ	21	
にぶい黄褐～灰白		底部指オサエ	21	
灰白			21	
灰			21	7
灰～灰白			21	7
灰～オリーブ黒			21	
灰			21	7
黄灰～灰			21	
灰～灰黄			21	
灰～暗灰			21	
灰～暗灰			21	7
灰			21	
灰～暗灰			21	
灰			21	
灰			21	7
灰			21	7

No	種別	器種	出土遺構	残存状況	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
5 4	瓦器	碗	SK 1 5	口縁部 1 / 4 弱	1 3 . 9	3 . 3	
5 5	瓦器	碗	SK 1 5	口縁部 1 / 9	1 2 . 8	3 . 0	
5 6	瓦器	碗	SK 1 5	口縁部 1 / 8	1 1 . 8	5 . 6	
5 7	瓦器	碗	SK 1 5	底部 1 / 9 強		1 . 8	6 . 0
5 8	瓦器	碗	SK 2	口縁部 1 / 9	1 4 . 8	3 . 5	
5 9	瓦器	碗	SK 1 6	口縁部 1 / 8	1 3 . 8	4 . 5	
6 0	瓦器	碗	SD 0 5	口縁部 1 / 4 弱	1 3 . 6	4 . 1	
6 1	瓦器	碗	SD 0 5	口縁部 1 / 4 弱・底部 1 / 4	1 2 . 9	3 . 6	5 . 7
6 2	瓦器	碗	SD 0 5	口縁部わずか・底部 1 / 2 強	1 1 . 4	4 . 2	4 . 8
6 3	瓦器	碗	SD 0 5	口縁部 1 / 6	1 0 . 8	4 . 0	
6 4	瓦器	碗	SD 0 5	口縁部 1 / 4 弱・底部 5 / 8	1 1 . 8	4 . 2	4 . 6
6 5	瓦器	碗	SD 0 5	口縁部 1 / 4 弱	1 1 . 1	3 . 1	
6 6	瓦器	碗	SD 0 5	底部 1 / 2		3 . 1	4 . 6
6 7	瓦器	碗	SD 0 5	底部 3 / 4		2 . 0	4 . 5
6 8	土師器	小皿	SD 0 5	口縁部 2 / 3	1 1 . 4	2 . 2	
6 9	須恵器	捏鉢	SD 0 5	口縁部わずか	3 1 . 0	4 . 1	
7 0	須恵器	捏鉢	SD 0 5	口縁部 1 / 7	2 9 . 4	4 . 2	
7 1	青磁	碗	SD 0 7	底部ほほ完存		2 . 8	5 . 1
7 2	石製品	硯	SD 0 7				
7 3	土師器	大皿	SD 1 3	口縁部 1 / 2	1 3 . 0	3 . 0	
7 4	土師器	小皿	SD 0 3	1 / 2 強	9 . 6	1 . 8	
7 5	瓦器	碗	SD 0 9	口縁部 1 / 9	1 4 . 6	3 . 6	
7 6	瓦器	碗	SD 0 6	底部 1 / 2		1 . 5	6 . 6
7 7	丹波焼	擂鉢	SD 0 2	口縁部わずか	3 9 . 7	8 . 8	
7 8	丹波焼	擂鉢	SD 0 2	口縁部 1 / 8	2 6 . 3	9 . 7	
7 9	丹波焼	擂鉢		底部 1 / 4		9 . 6	1 2 . 4
8 0	丹波焼	擂鉢	P 4 3	体部わずか		5 . 7	
8 1	磁器	碗		口縁部 1 / 4	9 . 7	4 . 0	

色調	胎土	備考	挿図	写真図版
灰			23	
灰白			23	
灰白～灰			23	
灰			23	
暗灰			24	
灰白～灰			24	7
灰～暗灰			25	7
灰白～にぶい黄橙			25	
灰白～オリーブ灰			25	7
灰白			25	
灰白～にぶい黄褐		外面暗文なし	25	8
灰			25	
灰			25	8
灰白～黒			25	8
灰白～にぶい黄橙		底部指オサエ	25	8
灰～暗灰			25	8
灰～暗灰	3mm以下の砂粒含む		25	8
オリーブ灰			26	
			26	8
黄橙			27	8
にぶい黄橙～褐灰		内面煤付着	27	8
灰			27	
灰			27	8
灰赤～にぶい赤褐	0.5～2.5mm大の砂粒含む		28	9
赤～赤褐	1～2.5mm大の砂粒含む		28	9
明赤褐～にぶい橙	4mm以下の砂粒多く含む		28	
褐灰～青灰	0.5～2mm大の砂粒わずかに含む		28	
			28	

写 真 図 版



I区全景 西から



旧河道断面 北東から

図版2 遺構



II区全景 西から

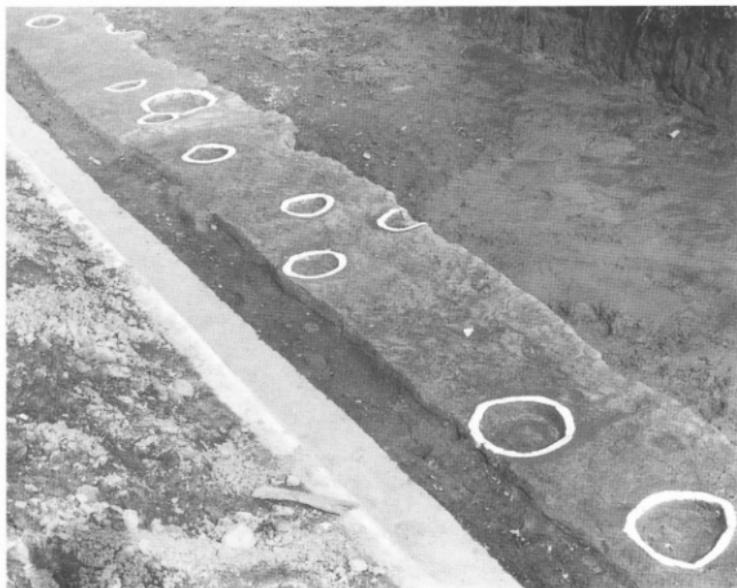


東端部 北東から

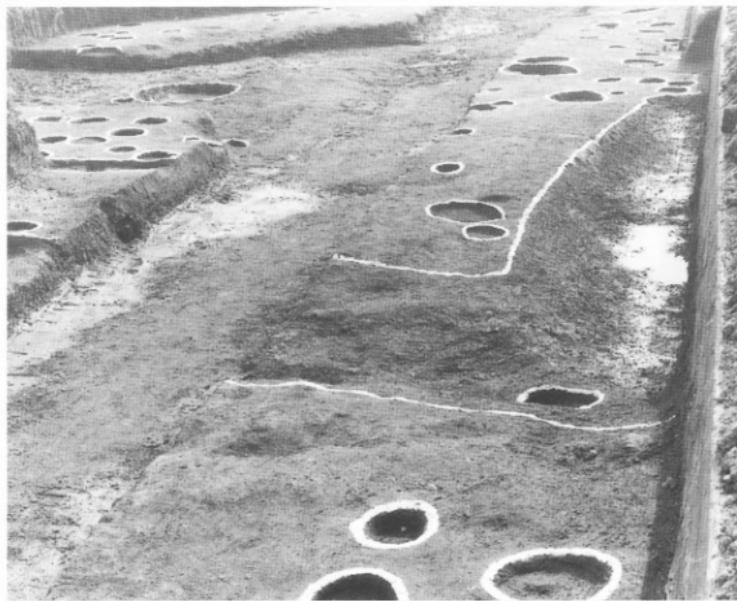


III区全景 西から

図版4 遺構



西端部 西から

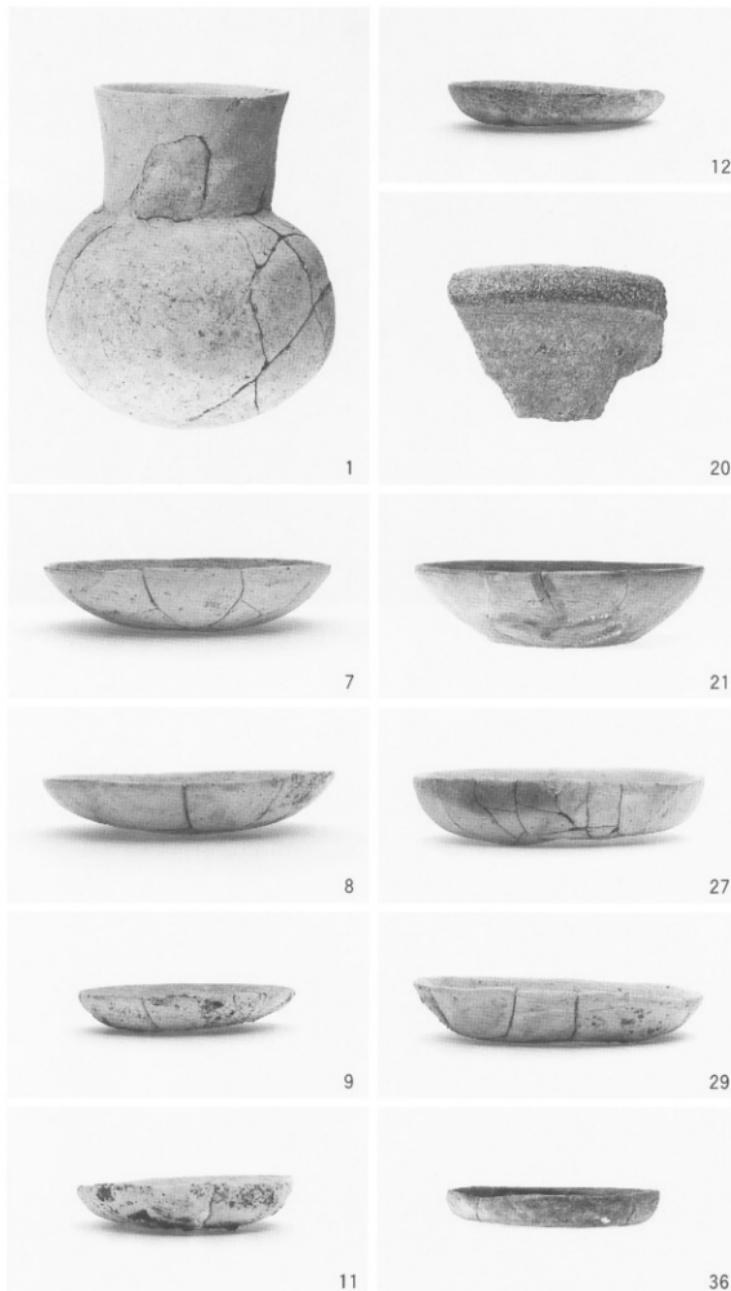


中央部 東から



S D 0 2 北から

図版6 遺物



基盤層出土土器（1） P10出土土器（7～9・11） P24出土土器（12・20） P67出土土器（21）
P07出土土器（27） P41出土土器（29） P33出土土器（36）



40



53



41



59



43



60



47



61



52



62

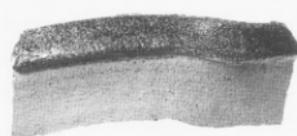
P61出土土器 (40) P25出土土器 (41・43) P16出土土器 (47) P54出土土器 (52)

P44出土土器 (37) SK16出土土器 (59) SD05出土土器 (60~62)

図版8 遺物



64



70



66



73



67



72



68



74



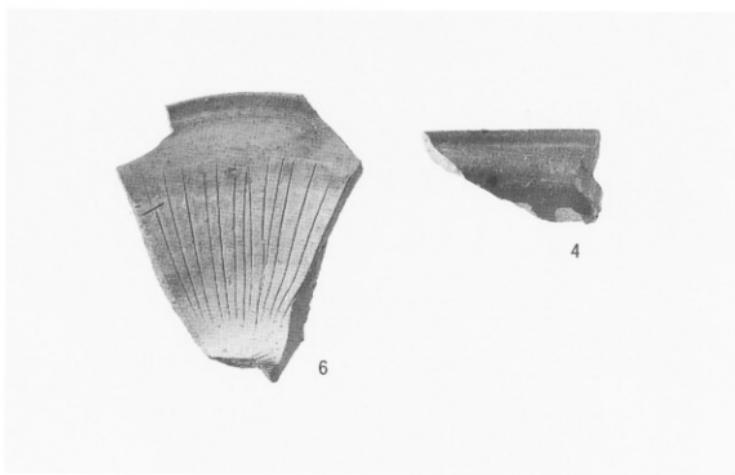
69



76

SD05出土土器（64・66～70） SD07出土土器（72） SD13出土土器（73） SD03出土土器（74）

SD09出土土器（76）



I区 旧河道出土土器 (6・4)

III区 包含層出土土器 (77・78)

八上上遺跡

一般国道372号線 交通安全施設等整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003(平成15)年1月発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL. 078(531)7011

發 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL. 078(341)7711(代)

印 刷 株式会社 精文舎

〒652-0047 神戸市兵庫区下沢通6丁目2番18号

TEL. 078(575)4729(代)